翻訳小品

芥川龍之介

一　アダムとイヴと

小さい男の子と小さい女の子とが、アダムとイヴとの画を眺めてゐた。
「どつちがアダムでどつちがイヴだらう？」
さう一人が言つた。
「分らないな。着物着てれば分るんだけれども。」
他の一人が言つた。（Butler）

二　牧歌

わたしは或南伊太利亜（イタリア）人を知つてゐる。昔の希臘（ギリシヤ）人の血の通つた或南伊太利亜人である。彼の子供の時、彼の姉が彼にお前は牝牛（めうし）のやうな眼をしてゐると言つた。彼は絶望と悲哀とに狂ひながら、度々泉のあるところへ行つて其水に顔を写して見た。「自分の眼は、実際牝牛の眼のやうだらうか？」彼は恐る怖る自らに問うた。「ああ、悲しい事には、悲し過ぎる事には、牝牛の眼にそつくりだ。」彼はかう答へざるを得なかつた。

彼は一番懇意な、又一番信頼してゐる遊び仲間に、彼の眼が牝牛の眼に似てゐるといふのは、ほんたうかどうかを質（たづ）ねて見た。しかし彼は誰からも慰めの言葉

を受けなかつた。何故と云へば、彼等は異口同音に彼を嘲笑ひ、似てゐるどころか、非常によく似てゐると云つたからである。それから、悲哀は彼の霊魂を蝕み、彼は物を喰ふ気もしなくなつた。すると、とうとう或日、其土地で一番可愛らしい少女が彼にかう云つた。

「ガエタアノ、お婆さんが病気で薪を採りに行かれないから、今夜わたしと一所に森へ行つて、薪を一二荷お婆さんへ持つて行つてやる手伝ひをして頂戴な。」

　彼は行かうと言つた。

　それから太陽が沈み、涼しい夜の空気が栗の木蔭に漾つた時、二人は其処に坐つてゐた。頬と頬とを寄

せ合ひ、互ひに腰へ手を廻しながら。
「をう、ガエタアノ、」少女が叫んだ。「わたしはほんたうに貴方（あなた）が好きよ。貴方がわたしを見ると、貴方の眼は――貴方の眼は」彼女は此処（ここ）で一寸言ひよどんだ。――「牝牛の眼にそつくりだわ。」
それ以来彼は無関心になつた。（同上）

三　鴉

鴉（からす）は孔雀（くじやく）の羽根を五六本拾ふと、それを黒い羽根の間に挿（さ）して、得々と森の鳥の前へ現れた。

「どうだ。おれの羽根は立派だらう。」森の鳥は皆その羽根の美しさに、驚嘆の声を惜まなかつた。さうしてすぐにこの鴉を、森の大統領に選挙した。

が、その祝宴が開かれた時、鴉は白鳥と舞踏する拍子(ひやうし)に折角(せつかく)の羽根を残らず落してしまつた。

森の鳥は即座に騒ぎ立つて、一度にこの詐偽師(さぎし)を突き殺してしまつた。

すると今度はほんたうの孔雀が、悠々と森へ歩いて来た。

「どうだ。おれの羽根は立派(りつぱ)だらう。」

孔雀はまるで扇のやうに、虹色の尾羽根を開いて見せた。

しかし森の鳥は悉（ことごとく）、疑深さうな眼つきを改めなかつた。のみならず一羽の梟（ふくろふ）が、「あいつも詐偽師の仲間だぜ。」と云ふと、一斉（いつせい）にむらむら襲（おそ）ひかかつて、この孔雀をも亦突き殺してしまつた。（Anonym）

（大正十四年十二月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。